

2016年度第1号のレター発行となります。本号では、2016年10月1日(土)に東京未来大学にて開催されました「第44回支部例会(兼東北支部合同大会)」での支部会員の発表要旨、並びに、同日に執り行われました「印象評価サポートツール体験ワークショップ」(生活文化研究部会協賛)のご報告を掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 郭 潔蓉

### ◆第44回 関東支部研究例会 ご報告◆

2016年10月1日(土)、東京未来大学 本館・会議室1及び会議室2において第44回関東支部例会(兼東北支部合同大会)が開催されました。当日は両支部より14名の会員による研究発表が行われましたが、各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な例会となりました。以下、例会での研究発表の要旨を掲載致します。

#### ◆開会の挨拶: 東北支部長 佐藤和博 (弘前学院大学)

##### 1. 向野堅一編『誦雨寿言集』から考察する近代漢詩会の役割

##### — 筑豊地方における文人による人脈形成がもたらした経済活動情報 —

茨城大学 教授  
向野 康江

向野堅一(このけんいち・1868～1931)については、すでに福岡県直方市に向野堅一記念館が設立されている。一言でいうと、満洲日本人実業界を形成していった歴史的な人物である。どの人名事典にも「温厚」「文雅」なる性格が記されると同時に、文化面においても西猛利(創生)『満洲芸術壇の人々』(曠陽社、1929年)にも掲載されるほど、向野堅一の書画の評価は高かった。この向野堅一は自らも詩作をたのしんだ。それら詩作したものをまとめたのが『拙逸庵詩抄』である。そして大正13年(1924)に、次兄・向野齊が還暦を迎えたのを祝って、『誦雨寿言集』を編纂・出版した。「誦雨」とは、次兄・齊の号である。この漢詩集に寄稿した人々の経歴を精査し、筑豊地方における文人による人脈形成を経済活動的視点で分析することで、筑豊地方と東アジアとの関連性を見いだせるのではないかと予想している。一般的には、近世にと比較して、近代では漢詩教育や漢詩による文化活動が弱体化していると捉えられている。実はそうではなく、近代において別の用途を近代漢詩会は形成していったのではないかと考える。その用途とは何かを、近世の詩社と比較しつつ近代漢詩会の役割について考察する。

##### 2. 戦後の日本の盲図画工作教育方法論における青鳥会による『盲学校教育課程(小学部篇)』と

##### 戦後の盲図画工作科教育に関する諸誌との比較

茨城大学大学院教育学研究科 修士課程  
庄司 愛望

教育とは、教えて知能をつけること、社会の持続と発展のために、個人または特定の機関が一定の価値を志

向して未成熟な者とその社会に適応させる意識的な活動であり、次の世代(子ども, 青年)に対する文化伝達と価値観形成のための意図的働きかけをいう。それには、価値判断がつねにつきまとい、社会によって価値観を変え、形成することから、教育も社会の風習・伝統・思考方法・価値観などの総称である文化の1つであると考えられる。その教育のなかで、今日の発表では戦後の日本の盲図画工作科教育に眼を向けた。

現代の盲学校での造形教育(美術・図工)では様々な内容が行われている。視覚障害者のための造形教育において、どのような内容が行われてきたのであろうか。そしてどのような思想、価値判断であったのだろうか。その原点は、戦後に各盲学校において教育の参考になるように出版された青鳥会による『盲学校教育課程(小学部篇)』(盲学校教育課程委員会、昭和27年)であると考えた。今日の発表では、これとその後日本の盲学校における図画工作科教育に関する諸誌を分析・比較したい。

### 3. ドイツと日本における描画指導の比較

足立区立青井小学校教諭

黒田 潤子

酒井臣吾(1934-)によって提唱された「酒井式」による描画指導は、わが国における代表的な指導法として今日広く知られている。酒井式においては、自画像は鼻から順に描かせるなど、描き方の順序が明確に示されており、図画工作科において「何をどのように指導すべきか」悩む教師にとって、実践しやすいものである。また、部分から全体へと描いていくため、画用紙からはみ出したり、思いもよらないゆがみが生じたりして、結果的に強い印象の表現になる。それは、児童の概念化された対象の捉え方を壊すことにつながると考えられる。

一方ドイツでは、絵画表現は、点、線、面といった造形要素の関係性によって作りあげられるものと理解され、初等教育においても、こうした構成への理解を深めていけるような描画指導が展開されている。ドイツの美術教師ヘルマン・ブルクハルトによる授業実践記録『現代ドイツにおける美術の授業と子どもの絵』(1982)を読み解くことで、これら一連の指導は、単なる構成の学習にとどまるものではなく、既存の表現様式の模倣から子どもたちを解放し、自ら表現をつくり上げる可能性(創造力)を育むものであると理解できる。

本発表では、酒井式による描画指導と、ブルクハルトの描画指導を対比させることを通して、わが国における描画指導の課題とあり方について考察していきたい。

### 4. ICTと印象評価を用いた美術鑑賞支援ツールの開発

森画廊 森崎 巧一

東京工芸大学 助教 大海 悠太

早稲田大学国際情報通信研究センター 小楠 竜也

鑑賞者がモバイル端末を利用して美術作品に対する印象を容易に入力できる「印象評価ツール」と、ツールから入力された印象をサーバサイドで自動的に分析し、主成分分析などを行った結果をモバイル端末上で確認できる「印象分析ツール」を開発した。「印象評価ツール」においては、サーバサイド技術を活用してモバイル端末で印象を容易に回答できるように、インターフェースにレスポンスデザインを導入している。これにより、スマートフォンやタブレット端末など、様々な種類の機器や画面サイズに対応できるようになっている。鑑賞者は、モバイル端末の Web ブラウザで美術鑑賞支援ツール(Web サイト)にアクセスし、印象評価を入力するインターフェースを表示させる。また、「印象分析ツール」においては、サーバサイド技術を活用してサーバ上で印象評価データの分析処理を行うシステムになっている。鑑賞者が回答した印象評価データに対し、サーバサイドで主成分分析やクラスター分析を行い、モバイル端末上で分析結果をビジュアルに表示できるようにしている。

## 5. 大正期の子ども絵に関する研究

### — 啓助が取り組んだ2つの向野家家庭教育実践の比較を通して —

茨城大学大学院教育学研究科 修士課程

山田 秀平

明治から昭和初期にかけて満洲にて活躍した実業家向野堅一の四男啓助含む4人の息子と妻は、満洲で暮らす堅一と遠く離れた福岡で暮らしていた。大正2年、教育熱心な堅一の願いが通じ、息子たちは父親不在のもと、『骨肉』という手作り雑誌を作り始めた。各々が取り組んだ図画や作文などの作品が綴じられ、お互いに回覧・批評をし合っていた。これは、当時の向野家で行われた家庭教育実践の一つである。また、息子たちが日々の出来事を記した『日記』は、堅一にとっても息子達の生活の様子を知る手がかりとして機能したであろう。向野家にとって『日記』も、重要な役割をもった家庭教育実践の一つであった。

本研究では、両実践に取り組んだ末っ子の啓助を研究対象とし、両実践内の美術関連の作品に着目する。両実践の取り組みの違い、両実践内の啓助作品の比較・分析を通じ、啓助の美術活動及び成長等について概観することを目的とする。今まで美術教育史研究であり論点に上らなかった家庭での美術教育について取り上げることが、今後の美術教育史研究に寄与するものと考え。本研究は次代の美術教育史研究のための基礎的研究として取り組むものである。

## 6. 大正期向野堅一家の回覧雑誌『骨肉』にみる異国情緒

茨城大学大学院教育学研究科 修士課程

皆川 真理

大正期に家庭内教育の一環として行われた活動の一つに、向野堅一家の回覧雑誌が挙げられる。これは父親である堅一の教育理念が記された手紙が家族のもとへ届いたことを一つのきっかけとして始まった活動である。子どもによる手づくり雑誌『骨肉』は現時点で26冊存在する。毎度異なるデザインを表紙には当時の向野家の子どもたちの興味が端的に現れている。父の期待に応える形で大正2年(1913)に発刊された創刊号では、淡い色調にメルヘンチックな異国の絵が描かれている。各号の表紙、図画の部および挿絵において明らかに日本人ではない人物画や外国の物語の一場面を切り取ったような図画などが確認できる。創刊当初から散見される異国情緒あふれる絵を抽出して史料紹介を行う。加えて、大正期に日本に上陸し、現在も大阪通天閣に根付いている外国生まれのキャラクターであるビリケンを取り上げ、『骨肉』における図画分析を行う。ビリケンが上陸した翌年に登場するキューピーについても触れ、外国文化に触れた子どもたちの受け止め方に迫る。

## 7. 芸術教育論の今日的意義 —岡本太郎と岸田劉生の比較を中心に—

茨城大学大学院教育学研究科 修士課程

金山 愛奈

岡本太郎(1901～1996)と岸田劉生(1891～1929)は日本で芸術家として活躍を遂げた。本研究では両者が主張する芸術教育に対する考え方に着目する。岡本の『今日の芸術』(1954年)の教育的記述部分と岸田の『図画教育論』(1925年)を比較・分析する。両者の血族的共通点は、前者が岡本一平(1886～1948)、後者が岸田吟香(1833～1905)を父にもち、親子二代で歴史的活躍を果たした点である。ただし、岡本太郎の父・岡本一平と岸田劉生が同世代であり、岡本太郎と岸田の娘・麗子が同世代である。1世代ずれるものの、画家が美術教育に強く

関心を寄せ、独自の論を展開させている点では稀な共通例であろう。一方、相違点は、岡本には実子はいなかったこと、岸田は娘の絵を記録して教育論を展開していることである。さらに、岡本はパリへ留学し、岸田は日本に留まり活動を続けた。この点は、芸術家としての活動範囲の決定的な違いである。最終的に、岡本も岸田も人格形成に芸術の必要性を主張していることがわかる。二人の芸術家の教育論を抽出しつつ、戦前から戦後にかける美術教育の変遷を確認する。

## 8. パンパンと戦争花嫁: 二言説を紡ぐ試論

甲南女子大学 准教授  
ウオント盛 香織

1945年に第二次世界大戦で敗戦した日本は、進駐軍の占領下となった。貧困の中、生きていくために、進駐軍兵士に売春行為をした日本人女性があり、こうした女性はパンパンと言われ、日本人の多くが欠乏を強いられる中で、進駐軍の富を共有した裏切り者としてスティグマ化された。一方で、進駐軍兵士と結婚し渡米した日本人女性もあり、こうした女性は戦争花嫁と言われた。戦争花嫁もまた、パンパン同様、日本社会の裏切り者としてスティグマ化された。

戦後という特殊な状況を生き抜いたパンパンと戦争花嫁をめぐる研究は、しかし、両者を分断している。戦争花嫁研究者の林かおりはパンパンという汚名をすすぐのが、研究の目的であるといい、パンパン研究者の茶園敏美は、パンパンという名称に刷り込まれたスティグマを消し去るべきとしつつ、その研究射程に戦争花嫁たちの姿はない。本論は、パンパンでありかつ戦争花嫁と二重にスティグマ化されつつ、戦争花嫁とパンパン研究の二言説において分断されている女性たちを結びつけ、二言説を紡ぎ合わせることで、彼女たちに押し付けられたスティグマを疑問視し、戦後を生き抜いた女性たちを再評価する試論を展開する。

## 9. カズオ・イシグロが思い描く *Never Let Me Go* の日本性とは

岐阜薬科大学 教授  
武富 利亜

2005年に出版された、カズオ・イシグロの第六作目の長編小説である *Never Let Me Go* (邦題『わたしを離さないで』)は、2016年1月に日本でドラマ化された。主演は、綾瀬はるか、三浦春馬、水川あさみ等である。ドラマが封切りされる前に、綾瀬はイギリスへ渡り、イシグロと対談を行っている。このときの対談は、2016年の1月にNHKで放映され、同年の文藝春秋二月号に活字化された。イシグロは、日本のドラマの第五話までの台本を読んだと述べ、次のように語っている。「原作の根底にあるものは、なぜか非常に日本的だと以前から感じてきました。私はほかに日本を舞台にした物語も書いていますが、それら以上にこの作品は、イギリスが舞台なのに、どこか日本的なんです。ですから、ある意味で物語が故郷へ戻っていった。」実は、2011年に *Never Let Me Go* の映画のプロモーションで来日したときに、イシグロは同様の発言をしている。“This[Film, *Never Let Me Go*] is like a Japanese movie with English actors.”原作の冒頭では、作品の舞台は1990年代後半のイギリスということが書かれている。登場人物は全てイギリス人で、当然日本や日本人については一切触れられていない。従って、この作品を読んで「日本的」だと感じる読者はそう多くはないだろう。イシグロはなにをもって、この作品を「日本的」だと感じているのだろうか。

本発表においては、まず、原作の舞台をイギリスから日本に移すことにより生じる文化的相違をイシグロが読んだというドラマの第一話から第五話までの中から抽出する。次に、物語の主要な場面に焦点をあて、その場面は日本のドラマではどのように描かれているかを考察する。最後に、イシグロが思い描く *Never Let Me Go* の根底に流れる「日本性」とはどのようなものなのかを明らかにしたい。

## 10. テレビ広告から見る日中文化の比較 — オリンピック開催期間の広告を中心に —

明治大学大学院教養デザイン研究科 博士後期  
張 帥

日中文化は共通点と相違点が同時に両国の民族に幅広い範囲で含まれ、欧米圏文化と違う独特な東洋文化である。しかし、現在では、ビジネスや宣伝活動でお互いの理念を主張する際、ささやかなことから文化摩擦が起こる事例に関して一つでも簡単に例を挙げることができる。ところが、日中文化の相違に直面する際、広告は、まるで橋のような存在で両国に架かり、この大きなギャップを乗り越えるように助力している。十五秒あるいは数十秒の短編映画を通して、ある国のブランドに受け継がせる文化は他国で受け入れられ熟知される。このように見たところ、広告は、カルチャーギャップの制限から影響を受けないかどうか。カルチャーギャップの障害を通り抜けることができるのであれば、異質文化の中で制約されない存在だろうか。そこで、「文化」は日中広告を研究する独特な視点になることと考えられる。

2008年、中国人にとって非凡な一年だった。北京オリンピックは、単なるスポーツ大会ではなく、自国の実力を証明する絶好な機会でもあった。2020年、東京オリンピックの開催も目前になっている。一度に開催した経験を持つ日本は、リオデジャネイロ五輪の閉会式で日本の「8分間のプレゼンテーション」で伝えた文化情報がまた新たな変化を現していた。そして、会社がこの世界的なイベントのチャンスに乗じて、広告表現では五輪要素を利用し商品を宣伝するケースが多数存在している。五輪時期の広告表現から現した国の独特な文化がピークに達しているとも言えるだろう。そこで、本研究は、2008年から2016年までに放映された日本と中国の代表的なテレビ広告を分析し、日中の国民性と国家観など、広告の文化比較研究をより深く進めることを目的とする。

## 11. ペネロピ・ライヴリー作『リッチフィールドへの道』における記憶、アイデンティティー、“herstory”

中央大学 兼任講師  
板谷 洋一郎

現代イギリス女性作家ペネロピ・ライヴリー(Penelope Lively)の初の本格小説『リッチフィールドへの道』(*The Road to Lichfield*) (1977年)は、フェミニズム理論やウーマン・リブ運動の影響下で女性の自立や男女の役割を問い直す小説が次々と登場した時期に出版された作品で、イングランド南東部の小村に住む40歳の既婚女性アン・リントン(Anne Linton)が、老衰で施設にいる父を見舞うためスタッフォードシャーの小都市リッチフィールドを訪れるうち、父にかつて愛人がいた事実遭遇し、それを追求し始めることがきっかけで、彼女自身も父の友人と肉体関係を持ってしまった結果、半ば自分を見失ってしまい葛藤する姿を描く小説である。本稿では、中年期を迎えつつあるごく普通の女性が家族の記憶と情熱の追求に傾倒していくことに注目しながら、作品が「過去(の記憶)が現在を生きる個人に与える影響」を前景化させることを考察する。特に注目したいのは、老衰で認知力の低下した父の知られざる過去と向き合う過程でアンが、実際に起きたこと、起きたとと思っていたこと、そして起きてほしいとと思っていたことが複雑に入り混じる記憶の渦に呑まれること、彼女が期せずして不実の情熱に駆られ、家庭と奔放な愛を同時に求める二重生活というアイデンティティーの混沌に陥ること、そして記憶と情熱のうねりの中で苦闘することでアンがやがて過去と現在の関係に対する考え方を改め、自分を再び見出すことである。

## 12. 天狗のトリックスター性 — インドネシアのペトルとの比較分析を中心に —

国立音楽大学 助手  
川崎 瑞穂

発表者は日本の民俗芸能の囃子(音楽)を研究している。中でも天狗信仰と音楽の関係性に注目しており、Anthropology of Japan in Japan (AJJ)の2013年秋季大会「人・場所・実践の再考:文化人類学と日本研究の『境界』

を超える・疑う」における発表「トリックスターとしての天狗と、その音楽的表現:長野県飯山市『五束の太々神楽』における天狗舞の楽曲分析」(2013年11月10日、国際基督教大学)と、IReMusの“Journées Doctorales Musique et Musicologie”における発表“Les musiques de *Tengu*: analyse des rituels spectaculaires du Japon et de leur musique dans une perspective d’anthropologie structural”(2015年3月28日、パリ・ソルボンヌ大学)では、天狗が共同体の内と外を繋ぐ道化的な媒介者、神話学でいうところの「トリックスター trickster」であることを指摘し、その特徴が音楽によってどのように表現されているのかを分析した。しかしここでは、なぜ天狗がトリックスターといえるのかについて深く考察することができなかった。本発表では、J. P. B. de Josselin de JongやClaude Lévi-Strauss、山口昌男らによるトリックスター研究と、江馬務の妖怪研究を参照しつつ天狗の特徴を列挙したのち、インドネシアの影絵芝居「ワヤン」に登場するペトルの特徴との比較分析から、天狗がどのような点でトリックスターであるといえるのか、そしてトリックスターに共通する特徴である「長いもの」について考察する。

◆閉会の挨拶: 関東支部支部長 近藤 俊明 (東京未来大学)

\* 閉会后、以下のとおりを開催した。

◆印象評価サポートツール体験ワークショップ 実施のご報告◆

森画廊 森崎 巧一

東京工芸大学 助教 大海 悠太

早稲田大学国際情報通信研究センター 小楠 竜也

「第44回支部例会(兼東北支部合同大会)」閉会后、東京未来大学A棟402教室において、関東支部及び生活文化研究部会の共同開催による「印象評価サポートツール体験ワークショップ」が執り行われた。参加者は約20名。「印象サポートツール」の開発に携わった森三名によるレクチャーが行われ、参加者は各自パソコンを活用した体験ワークショップを行った。

以上

\* 総会終了後、懇親会を開催した。